爲に安んじ極めて安謐の生活を爲すに慣れたる者は假令多大の才能を有する者たりとも無爲に依りて悒々悶々己の能力を練磨せずして之を弱むること少なからざらん而して彼若し之と共に智弱く辯舌及び奮鬪に無經驗なるに於ては――我今日の狀態此の如し――治理の職を受くるに及んで毫も石造(の偶像)と擇ぶ所なからん故に此苦行より神品職の功に轉ずる者多からず而して其中多くは不適任と爲り失望落膽して不快の辛き結果を經驗するに至る。而も此事や毫も怪むに足らず若し苦行と修練とは同じからずとせんには甲の苦行を積む者は毫も乙の苦行に練習せざる者と異ならず。神品職の舞臺に出づる者は就中譽を度外視し怒を制して大なる智慮に充たざるべからず。然れども修道の生活に己を献げたる者は毫も之が練修を爲すべき動機に遭遇せず。彼の左右には彼を激し彼を

して忿怒の力を鎮靜するに慣れしむべき人なく又彼を稱賛拍手し彼をして人民の稱賛を蔑視することを學ばしむべき人なく教會の事務上に必要なる智慮に就きても彼等の慮るべき所多からず。故に彼等はその經驗せざる所の苦行に着手する時は疑惑を生じ困難を感じ周章狼狽して德に進捗せざるのみならず往々その齎し來りたる所のものを失ふ者亦多し。

第八。ワシリイ曰く何ぞや。然らば豈俗界に奔走する人々、世事を慮る者、紛議爭論に熟練したる者、多くの非行を逞うし華奢に慣れたる者を擧げて教會治理の任に當らしむべしとするか。

金口。我曰く福たる者よ請ふ意を安んせよ。此の如き者には司祭を選擧する時に當りて一顧をも與ふべからず乃ち衆人と共に住し之と交際しつゝ清淨安穩敬虔忍耐節制及び其他修道者の修むべき善

良の性質を修道者其人よりも善く完全に守ることを得るの人を思ふべし。多くの弱點を有するも獨接閑居するに於ては之を掩蔽するを得て人々と交らざるに於ては之を實地に施さゞるを得るも一たび衆人の前に出づるに及んでは嘲笑せられ大なる危險に服するの外窓も得る所なき者あり若し神の照管速に此火を我の首より遠ざけざりせば余も恐らく此危險に罹りしならん。此の如き者人々の上位に立たせらるゝ時は隱るゝ能はずして常に非難せらるゝ火が金屬的の物質を驗するが如く敎衆も亦其人の靈魂を試驗して其人の激怒し易きか或は怯懦なるか或は好名心に富むか或は驕傲なるか或は其他何等かの惡癖を有するかを探り忽ちその有らゆる弱點を看破して之を暴露し雷に暴露するのみならず益之を重きもの且頑なるものと爲す。身體の傷腐爛する時は醫治し難くなるが如く靈魂の諸慾も興奮激昂せらるゝ時は益猛烈と爲りて之に罹りたる人をして益多く罪を犯さしむるを例とす自省の念なき者は之を好名心傲慢及び利慾に傾け奢侈柔弱安逸に導き漸々之れより生ずる諸惡に陷らしむ。人々の中に靈魂の熱心を薄弱にし其の神に向ふの心を止むるもの多し而して其の首たるものを婦人に對するの應對なりとす。全群を牧するの司長は其一部分たる男子のことのみを慮り他の部分即ち罪に傾き易き故に由りて殊更甚大の焦慮を要する婦人のことは之を度外視すべからず乃ち主敎職を受けたる者は假令過大ならずとも平等に彼等の健康のことをも慮らざるべからず彼等病む時は彼等を見舞ひ悲む時には慰め安逸に耽る者あれば之を責め貧困の者は之を助けざるべからず。而も之を實行するに際し若し愼重緻密に己を持せざるに於ては奸惡者攻擊を加ふ

るの多くの途を有す。不行儀なる婦人のみならず貞節なる婦人の瞥見と雖も靈魂を慌亂することあり追從は心を惑はし譽は壓服し而して熱愛―此の諸幸福の原因たるもの―が之を利用すること其當を得ざる者に取りて無數の禍の原因と爲ることあり。又不斷の焦慮は智の鋭鋒を鈍ぐし鳥の如く飛翔するの能ある者を鉛より重からしめ怒氣勃々として恰も烟の如く靈魂の内部全體を昧ますに至る。此他の有害なる動作―上なる者下なる者智なる者無智なる者より加へらるゝ侮辱誹毀譴責等誰か能く之を枚擧し得る者ぞ。

第九。正しき判斷を下すの能なき者は殊更人を責むること酷にして辯護を聞きて容易に首肯するものに非ず。善良なる司長は此の如き人々をも蔑視すべからず乃ち彼等の非難に對しては極めて温厚の態度を以て且憤りて激怒せんよりも寧ろ彼等の無智の非難を赦さんとする覺悟を以て之に答へざるべからず。若し福たるパワェルが門弟より、窃取の嫌疑を蒙るを恐れて他の者をして亦金錢を處理することに與らしめたりとせんには―彼曰く『此れ我等の務に託する所の惠施の饒なるに由りて人の謗を受けざらんことを愼むが故なりと(コリンフ後八の二十)―我等も亦惡き嫌疑は―假令虚僞なりとも又は取るに足らずして我等の譽に對し極めて不相應のものたりとも―之を打消さんことに充分盡力すべきに非ずや。我等が如何なる罪に對してもパワェルの窃取に對するより遠く相隔るものに非ず、されど此の非行より斯くも遠ざかれる彼は人民の嫌疑甚だ不合理無智なるに拘らず、之を度外視せざりき蓋し此の福たる偉大なる首を此の如き事に疑ありとするは實に無智の至りなればなり。此嫌疑や此の如く取るに足らずして狂人に非ずんば恐らく之

を疑ふ者なきに拘らずパワェルは預め其原因を芟除す彼は人民の冒昧を蔑視せず故に彼は奇跡と云ひ品行の温厚と云ひ我は衆人より尊敬驚異を博するに誰か我に此の如き事ありとの嫌疑の念を起す者ぞと云はず。彼は全く之に反して此の悪き嫌疑の起らんとするを洞見預定して之を根より絶てり更に詳言せばその起るを許さざりき。何故ぞ。他なし彼曰く『我等は主の前のみならず乃ち人の前にも善からんことを慮るなり』と(同上二十一節)。此の如く啻に起る所の悪き風聞を根絶中止せんことを努むべきのみならず遙に其の出でんとする所を洞見し預めその由りて出づべき原因を撲滅せんことを慮りその成り立ちて人民の口に播傳するを待つべからず何となれば事既に此に至れば之を絶滅すること容易に非ず甚だ困難にして或は之を絶滅する能はざることあり且人民の爲め害を生せざらんとせば之を絶滅するに危險なることあり。されど我は到底遂げ得べからざるものを遂げんとして何處まで止まらざるべきか凡て此等の困難を枚擧せんとするは海を測るに異ならず。若し諸慾より清き者―但不可能のことたり―と雖も他人の罪過を矯正せんが爲め勝て數ふべからざるの憂悲に遭ふを免れずとせんには己と他人の瑕瑾を矯正せんと欲する者自己の弱點あるに於ては如何に測るべからざる勞苦焦慮困難を忍ばざるべからざるかは請ふ之を三思せよ。

第十。ワシリイ曰く汝豈今單獨の生活を爲して此の勞苦に修練せず焦慮する所なきか

金口。我曰く今も亦之れあり此の多難の生活を爲すの人間は爭でか焦慮勞苦を免るゝを得んや。然れども茫々たる大海に飛び込むと

川を渡るとは同日の論に非ず彼此れの焦慮の間の差も亦此の如し我にして若し他人の爲に有益なる者たることを得たらんには我今自ら之を希望し此事我が熱切なる祈禱の目的たるべきも我は他人に利益を與ふること能はざるを以て少くとも己自身を暴風の中より救脱するを得ば足れりとするのみ。

ワシリイ曰く汝豈此を以て一大事と爲すか概して他の何人にも益を與へずして救はるべしと思ふか。

金口。我曰く汝の言ふ所善し至當なり隣の救贖の爲に何事をか爲さざる者救はるゝを得べしとは我亦自ら信せざる所なり。夫の「タラント」を減せざりし事は毫も憐れなる僕の助けと爲らず乃ち之を增さず二倍の利益を來さゝりし爲め彼を亡したり(マトフェイ二十五の二十四至三十)。然れども我は此の如き名譽を受けたる後惡しくなりて他人と己とを滅さんよりも何故他人を救はざりしやとて罪せらるゝは我に取りて其罰輕かるべしと思ふ。我は今我の受けんとする罰は我が罪の重きに相當するものなるも權を受けたる後に於ては多人を誘惑したるが爲め幷に我に至大の名譽を與へたるの神を侮辱したるが爲め二倍三倍のみならず幾千倍のものたるべしと信ず。

第十一。故に神はイズライリ人にも彼等が神より特典を賜はりたる後犯したる罪の爲に大なる罰を蒙らんとするを示して彼等を責むること頗る嚴なりき。彼は時として『全地の諸族中我特に爾等を認めたり故に我爾等の罪に因りて爾等を罰せん』と云ひ又時として『我は爾等の子等の中より預言者を興し爾等の少者の中よりナザレト人を興さん』と云へり(アモス三の二二の十一)且預言者を興すの先に

献祭式を制定するに當り司祭の罪が平常の人の罪より遙に大なる罰を蒙らんとすることを示さんと欲して彼は司祭の爲めには全國民の爲に献するが如き献祭を献すべきを命じたり(利末四章)。彼は之を以て司祭の傷が全國民の傷の如く大なる助けを要するを示すに外ならず而もその傷にして重からざりせば大なる助けを要せざりしならん其罪の重きは其性質に依るに非ずして此罪を行ひたる司祭の位に由りて然るなり。然れども此職を行ふ人のことに就ては我亦何をか言はん。神品職に何等の關係をも有せざる司祭の女の如き己の父の位の故に由りて同一の罪の爲め更に重き罰に處せらる。犯罪は彼等にありても平民の女にありても同一にして例へば彼此同じく淫を行ひたりとするも甲は乙よりも更に重き罰に處せらる(利末二十一の九復傳二十二の二十一)

第十二。神が如何に強く汝に示すに首長たる者が從屬者よりも更に大なる罰に處せらるべきを以てするを見るか。司祭の女を其父の爲め他の女よりも重く罰する者は其女の罰を重くしたる張本人を他人と同等の罰に處せずして更に重き罰に處せん而して此事や至極當然なり何となれば害は獨り首長其人に止まらずして之を仰ぎ視る弱き人々の靈魂をも亡ぼすが故なり。預言者イエゼキイリも此意を示さんと欲して牡羊と牡山羊に對するの裁判を區別す(イエゼキイリ三十四の十七)。今や我の恐れたる所以汝の爲に明なるか前述に加ふるに左の事を以てせん假令今靈魂の情慾をして全く我を制御せざらしめんが爲め多く勞すること必要なるも我は此勞を忍びて苦行を避けず。例へば虛榮心今又我を制するも我は之に反抗し奴隷とせらるゝを悟ること屢之れあるも亦時として靈魂を壓

虐したる者を譴責することあり。今猶邪なる希望我を襲ふことあるも左ほど烈しき火焔を燃え起さず何となれば目は此火を燃すの材料を外部より受けざればなり他人が惡きことを言へば我其言ふ所を聞くべきも對談者なきを以て余は全く此弊を免かる壁は固し言ふ能はざるなり。又我が左右に我をして憤激せしむる者なきにせよ怒も亦避くるに由なし。不道德の人々及び其行爲を屢記憶するより我が心を燃え起さしむることありと雖も全然燃えしむるに非ず我は我が瑕瑾を放棄して他人の瑕瑾に容喙するの頗る不條理にして極めて災なる所以を勸說し以て忽ち其火焔を鎭靜す。然れども人民の間に入り勝て數ふべからざる煩悶に忙殺されたらんには我既に己に對して此の如き勸說を加ふるに由なく之に對して指南とすべき思想を發見するを得ざらん乃ち斷崖より激流若くは其他之に類するものに攫はるゝ者はその行先滅亡に瀕するを知ると雖も己を助くるの術を案出する能はざるが如く我も一たび情慾の滔々たる大海に陷るに及んでは假令罰の日々我が爲に募るを見ると雖も今日の如く猛省して四方より此の猛烈なる氣勢を阻止することを我に取りて前日の如く容易ならざらん。我が靈魂は弱く大ならずして啻に此等の情慾に容易く壓せらるゝのみならず諸慾中の最も陋劣なる嫉妬に罹り易く冷然として侮辱をも榮譽をも忍ぶ能はず乃ち後の者は非常に慢心を起さしめ前の者は鬱々悶々たらしむ。猛き獸は强健なる時は之と戰ふ者就中弱き者及び無經驗の者に勝つと雖も之を飢え疲らす時は其猛き氣も挫け勢力の大部分失はれて甚だ勇猛の人に非ざるも之と戰ふを得るが如く靈魂の情慾に對しても亦然り之を弱らす者は能く彼等をして健全なる思考

力に從はしむるも熱心之を養成する者は己の爲め至難の戰爭を準備するものにして之を己の爲め頗る恐るべきものと爲し生涯その奴隷と爲り戰々兢々として之に事ふるに至るなり。此の猛獸の爲めの食は果して何ぞ。盧榮の爲めには名譽及び稱贊、驕傲の爲めには權力及び威勢、嫉妬の爲めには隣の賞讃せらるゝこと、貪慾の爲めには施濟者の矜恤、不節制の爲めには奢侈及び婦人と數度の會見又他の慾の爲めには他のものなり。我人々の間に立つに至らば此等の獸は皆烈しく我を襲ひて我が靈魂を惱まし我をして恐怖戰慄せしめ此を排すること我に取りて極めて至難と爲らん。而も我此に止まるに於ては假令彼等に勝たんが爲め大なる盡力を要するも彼等は神の恩寵に依りて服從し我に達するは唯彼等の吼る聲のみ。故に余は此草廬に止まりて世と交際を絶ち人と交はらず他の之に等しき多くの非難を聞きて忍耐す此非難を排せんことは余の希望する所なるも之を排するに由なくして痛嘆憂悲するのみ余は世と交はり併せて今日の安全を保つ能はず。故に此の如き困難の狀態に立てられたる者を罪せんよりも寧ろ之に憐愍を垂れんことは余の汝に願ふ所なり。然れども余は未だ汝をして我が意を諒とするに至らしめず。されば一事の未だ打明けざる所のものを汝に告ぐるは今方に其時期なり。或は之を以て信ずべからざる事と見做す人多く之れあるやも知るべからずと雖も余は之を打明くるを耻とせず。假令我が言は惡き良心と我が多くの罪とを暴露するとも知らざる所なき神が嚴格に我を罰すべきを以て我亦何ぞ人人に秘すべけんや。打明けざるものとは果して何ぞ。汝が此の決心(主教に選ばるゝこと)のことを我に告げたる日より我は全く身體

を衰弱せしむるの危險を感じたること屢之れありき恐怖憂悶の我が靈魂を襲ひたること此の如し。余はハリストスの新婦の光榮その神聖、屬神的の美、聰明壯嚴を想像し己の往弱を顧みて之が爲に痛哭して自ら不幸の者と稱し屢嘆息しつゝ自ら惑ふて心窃に之を勸説したる者果して誰ぞと云へり。神の教會は何が故斯くまで罪を犯したるか。彼は何が故衆人の中最も卑賤なる我に己を委ね斯かる汚辱を蒙りて己の主宰の怒を招かんとするか。我は自ら此の如く屢思考しつゝ此の如き不鉤合の意味を忍ぶ能はずして恰ち病者の如く疲れ倒れて何ものをも見ることを能はず聞くこと能はざりき。斯く茫然自失の念過ぎ去りたる時は(時として中止したることもあり)之に次て熱涙滂沱憂々鬱々として熱涙の長く垂れたる後再び恐怖の念襲ひ來りて我が心を攪亂震撼せり。我は過去の時日を此の如き暴風の中に送りしに汝は之を知らずして我を以て靜坐安居するものと思へり。然れども我は今汝に我が靈魂の暴風を暴露す汝或は之が爲め非難を中止して我を恕せん。我の之を汝に暴露するは抑何故ぞ。汝若し明に見んと欲せば我が心を汝に示すこと必要なるも此事不可能なるに依り少くとも朧氣ながらも汝に我が憂悶の暗黑を示さんと努むるのみ。試に天下を掌握する國王の女が新婦と爲り其容貌人間の體質に卓越し遙に天下の婦人を凌ぐほど非常に艶麗にして加ふるに靈魂の德秀てゝ天下の男子を後に瞠若たらしめ其品行の端正は以て聰明の有らゆる要求を凌駕しその眉目の清秀は以て身體の有らゆる美を昧すに足ると爲さん而して次に其新郎は啻に之が爲め此女に戀々たるのみならず一種言ふべからざるの情緒纏綿たるものありてその執着の念力曾て之を

戀ひ慕ひたる崇拜者の上に出づるに此の愛情燃ゆるが如き人何處よりか取るに足らざる世に蔑視せらるゝ者身分卑しく身體不具にして衆人中の最も無能なる者その戀ひ慕へる女と結婚せんとするとのことを聞きたりと爲さん。我が憂悲の情を汝に示すこと之を以て未だ足らずとするか。猶之が形容を繼續せざるべからざるか我が憂悶を示すが爲めには我は之れにて足れりと思ふ前の譬喩を擧げたるは乃ち之が爲めのみ然れとも我が恐怖驚愕の程度を示さんが爲め他の形容に轉せん。試に歩兵騎兵及び水兵より成るの軍隊あり艨艟林の如く海を蔽ひ歩兵騎兵隊は山野に滿ち刀劍は燦然として日光に輝き其光線は兜と楯との光を反射させ劍の鏘々たる音、軍馬の嘶く聲は天に達し海も見えず空地も見えず四面皆刀劍の林立するのみと思へ而して獰猛剽悍の敵の彼等と相對峙するものありて干戈將に相見えんとする時田舍に生長して笛と杖の外何物をも知らざる少年を携へ來りて之に鐵の鎧を着せ全軍を巡りて其の將軍射手投石者各隊長嚴しく武裝したる兵士騎兵鎗兵軍艦と其司令官之が乘組の兵士幷に船中に積みたる多くの武器を示し又彼に示すに敵陣と敵の獰猛の面相、種々の兵器、無數の武器、深溝、懸崖、絶壁を以てし又恰も妖術の力を以て飛翔するが如き敵の軍馬と恰も空中を驅るが如き兵士とその有らゆる權謀術策を示し又劍の雲、箭の雨その濃きを以て天日を蔽ふが如き飛ぶ矢の生ずる闇霧、夜よりも暗き闇黑、目を昧ますこと闇黑に劣らざる黄塵、鮮血の河、倒るゝ者の呻吟、立つ者の悲鳴、累々たる屍、血に塗れたる車輪、累々たる死屍に躓きて騎者と共に倒下に斃るゝ馬、血と弓矢と馬蹄と混同散亂するの傍ら人の頭、手、頸、脛、

截り去られたる胸、劔に附着したるの腦、目を突き貫きて折れたる鋭き箭など戰爭の慘狀を枚擧し又海戰の災厄をも枚擧して軍艦の或は海中に燒かれ或は搭載の兵士と共に海中に擊沈さるゝの狀、波浪の怒號、舟人の喊聲、兵士の悲鳴、血と波と混じて船舷を打つの飛沫、甲板上に横たはるの屍、溺れ浮びて岸上に打揚げらるる屍、波間に漂ふて船舶の通航を壅塞する屍等を示し彼に此の戰爭の慘憺たる狀を明示して更に捕虜の災難と死よりも辛き奴隷の狀を語り此等のことを悉く告げ了りて彼に直に馬に跨りて此軍の將綬を帶びんことを命せよ。汝豈此少年斯かる談話を聞き了るを待たず直に驚絶失神すと思はざるか。

第十三。我は我が言を以て事實を過大にすと思ふ勿れ(斯く見ゆるは)恰も牢獄に入れられたる如く肉體に閉ぢ籠められたるの我等が寔

も無形の者を見ること能はざるが故なり。汝は宜く我が述べたる所のことを過大と見做す勿れ。汝若し己の目にて惡魔の暗黑なる軍勢とその猛烈なる攻擊とを目擊したらんには余の形容したるよりも更に慘憺たる恐るべき戰爭を見ん。此に用うるものは銅や鐵に非ず馬や車輪に非ず、火や箭や其他之に類する有形のものに非ず遙に此等よりも恐るべき他の武器なり。斯かる敵は鎧をも楯をも劔をも鎗をも要せず靈魂にして甚だ毅然たらず且毅然たるに先だち神の照管にて堅められざるに於ては此の厭ふべき敵の姿のみにても靈魂を擊ち敗るに充分なり。若し己より此肉體を脱し若くは肉體と共にしてなりとも端然恐るゝことなく自己の目にて惡魔の悉くの軍勢と其の我等と戰ふの狀を見るを得たらんには汝の目に觸るゝものは血の河と累々たる死屍に非ず乃ち靈魂の殺害とそ

の重傷にして其狀の慘絶なる汝恐らくは我の今汝に形容したる所のものを以て兒戯と爲し戰爭と云はんよりも寧ろ戯れと爲さん日日靈魂の傷けらるゝこと此の如くそれ多し。而して此傷の加ふる死は身體の傷の加ふるが如きものに非ず乃ち靈魂の身體と異なる如く彼此の死も亦相異なるなり。靈魂が傷を受けて斃るゝ時は身體の如く無感覺と爲りて横はるものに非ず乃ち此に於ては惡き良心の苛責に遭ひて苦み此世を去るに及んでは審判の時永苦に服す若し惡魔の加ふる傷の爲め痛みを感せざる者あらばその無感覺にて己に更に大なる災を招くものなり何となれば最初の傷にて痛みを覺えざる者は直に第二の傷を受けて第二の傷に次ぎて第三の傷をも受くるに至ればなり。汚鬼は人の靈魂の安閑として前の傷を蔑視するを見れば之を擊ちて遂に絶息するに至らしめざれば止まず。若し彼の襲擊の方法をも知らんと欲せば則ち彼等の甚だ猛烈にして且種々なるを見ん。欺騙奸策の種類を多く知る者此の汚鬼の右に出づる者あらじ是れ彼が大なる勢力を得る所以なり而して何人たりとも此の狡猾なる魔鬼が人類に對して遺恨極まる憎惡の念を懷くほど己の最も惡しき敵に對して憎惡の念を懷くこと能はず。若し彼が鬪ひ振りの熱心を見たらんには之を人間の鬪ひ方と比較するも笑止ならん人若し最も獰惡猛烈なる獸を選びて之を彼の狂暴に比したらんには猶猛獸の彼に比して大に温柔靜穩なるを認めん彼が我等の靈魂に對して激怒すること此くの如く其れ甚し且夫の戰爭は時刻も短く其の短きと共に多くの休息あり。日の暮と云ひ戰爭の疲勞と云ひ食事の時と云ひ其他通例兵士をして休息を得せしむるもの多きを以て武裝を解きて氣を勵まし飲食及び其

他多くの方法を以て元氣を回復するを得べし。而も好惡者と闘ふに於ては苟も常に無傷の者たらんと期したらんには決して武裝を解く能はず睡眠にも耽る能はず。或は武裝を解きて倒れて亡ぶも或は常に武裝儼然として警醒するか二者その一を選ばざるべからす。此敵は常に己の軍勢を率ゐて我等の怠慢を窺ひ我等の滅亡を慮ること我等が己の救贖を慮るよりも遙に鋭意熱心なり。就中彼が我等の目に見えずして突然攻撃を加ふるの一事常に警醒せざる者に取りて彼との戰を困難ならしむ(是れ害を加ふること最も多きものなり)。汝豈此戰爭に於て我をしてハリストスの軍を指揮せしめんと欲するか。然れども此事たる恐らく惡魔の爲に指揮すると異なるなけん。若し他人を指揮管理すべき者衆人よりも無經驗且薄弱ならんには其の無經驗に依り己に委ねられたる所のものを敵に交付してハリストスの爲に指揮すと云はんよりも寧ろ惡魔の爲に指揮する事とならん。汝何ぞ嘆息するや。何ぞ哭するや。今我に遭遇したる所のことは哭すべからずして須く欣喜悅樂すべきことなり。

ワシリイ曰く然れども我の狀態は然らず我が狀態は之に反して非常に痛哭すべきものなり何となれば今にして我始めて汝が如何なる災難に我を陷れたるかを悟りたればなり。我は非難者に向ひて汝を辯護せんが爲に言ふべき所の事を汝より聞かんとして來りたるに汝は我に前の焦慮よりも更に新なる憂慮を負はしめて我を歸さんとす。我は已に彼等に對して汝の爲に言ふべき所のことを慮らずして我が己の爲め己の罪の爲め神に對して如何に應答すべきかに就て焦慮す。然れども汝若し聊かにても我が爲に慮る所あり若

しハリストスに於て安慰あり若し愛の喜悅あり若し慈憐及び矜恤あらば(フィリピ二の一)蓋し此の危險に陷れたることに就て他人よりも汝の力與かりて多きに居ることは汝の知る所なり)請ふ佑助の手を垂れて凡そ我を奬ますを得べきことを言ひ且行へよ片時たりとも我を棄ることなく乃ち今汝と共に前日よりも更に親密に相交はるを得るが如くせよ是れ我の汝に懇願哀求する所なり。

金口。余は之に對し莞爾として曰く焦慮の荷此の如く重きに際して我果して何を以て汝に助け如何なる利益を汝に與ふるを得べきか然れども汝若し之を欲せば、愛すべき首よ、請ふ憂ふる勿れ。汝が煩忙より休息するを得べき時には我汝と共に其日を送り汝を慰め苟も我が力の及ぶ所のことは一も之を放棄せざらんと。是に至りて彼は哭すること更に甚しくして起てり我は之を抱き其首に接吻し之を送りつゝ毅然として難事を凌くべきことを勸告したり。

我曰く汝が此務めよりして勇敢を博し我危險に在る者をも彼の日に於て己の永遠の第宅に受くるに至らんことは余が汝を召して汝に己の羔を託したるのハリストスに對して信ずる所なり。

司祭に按手後の説教

是れ聖イオアンがハリストス降生後三百八十六年の初マンティオヒヤに於て同地の主教フラヴィアンに依り司祭に按手せられたる後演述したる所のものなり、本文には「己れ及び主教并に多數の人民のことに就て述べたる第一の説教」と題す即ち聖堂の講座より演述したる諸説教中の最初の説教の意なり。

我に遭遇したる所のことは果して眞實なるか。行はれたる所のものは實際行はれて我は自ら惑ふに非ざるか。今は夜半及び夢に非ず實際白晝にして我等皆醒め居るか。白晝何人も眠らず醒め居る時に於て卑賤取るに足らざる少年が斯かる高き權位に昇せられたりとは誰か能く之を信ぜん。夜半此の如きことあらば毫も怪むに足らざらん。其時には身体不具にして必要の食物をすら有せざる者

も熟睡するに及んで己を体格整然たる好男子にして國王の宴に陪するに足る者として見ん然れども此想像や睡眠及び夢中の欺騙なり。夢の性質や此の如く機巧架空的にして奇々怪々の戯れにて自ら慰むるものなり。然れども白晝には何人たりとも實際此事を斯く容易に成るものとして見ざらん。而も汝等今見るが如く夢より も信ずべからざること行はれ成就して此の大なる人口稠密の都會偉大なる人民は我賤しき者に向ひ恰も我より重大のことを問かんとして來れるものゝ如し。然れども假令我は乾くことなく滔々として流るゝ河の如く我が口に説教の泉ありたりとするも聽聞の爲め斯く多く來る者あるに於ては水流は恐怖に依りて忽ち止まり水は逆流するに至るも知るべからず而も我は當に河と泉とを有せざるのみならず涓滴をも有せざる時に於ては爭でか此の微々たる小流も恐怖に依り涸れて乾き通例身体に遭遇するが如きことなきを恐れざらんや。身体に如何なる事遭遇するか。手に多くの物品を握りて指にて之を收緊けつゝ驚愕の餘り神經の衰弱と体力の疲勞よりして悉く取落すことあり。此の如きこと今日亦我が靈魂と假令微々たりとも我の辛勞して蒐めたる我が思想とに遭遇し恐怖の餘り之を忘却し皆消え且飛び去りて我が智を空虛と爲さんことを恐る、故に我は汝等首長たる人々幷に服從者たる人々總体に汝等が聽聞の爲に來りたるを以て我を恐怖せしめし如く祈禱の熱心を以て我に勇氣を吹込み多くの力を以て傳ふる者に言を賜ふ者(聖詠六十七の十二)に我にも言を賜はり我が口の啓かれんと(エフェス六の十九)を祈らんことを請ふ。汝等斯く多く且偉大なる者に取りて一少年の恐怖にて衰弱したる靈魂を再び堅めんこと固より難から

ず且汝等此の我が願を成就せんこゝ。然し當然ならん何となれば我の此籤を受くるに決したるも汝等の爲め汝等の愛の爲なればなり此愛の勢力や至大にして之に比敵すべきものなく我は未だ曾て斯かる場所に出でたることなく常に聽聞者の間に在りて默々として聽聞するを樂みたるに拘らず能辯に甚だ無經驗なる我をして敎訓の場所に出でゝ演述するに至らしめたるもの實に此の愛の力なりされど汝等の集會を默々にして過ぎ去り熱心に聽かんと欲する者あるを見ながら假令其人衆人より無口なりとは云へ一言をも之に言はざるほど冷酷無愛想ならんや。されば我は始めて聖堂に於て演述するに當り緒言の初果を我等に此舌を與へたるの神に獻せんと欲す蓋し斯くするこそ當然ならめ何となれば物置及び酒搾の初果のみならず言の初果をも亦言(神)に獻ずること當然にして言の初果は束の初果よりも更に多く獻ぜざるべからざればなり。且此果實は我等にも適當し崇拜する神其者も快しとする所なり。房や穗は地の底之を生じ雨の流之を培養し農夫の手之を耕作し而して聖なる歌は靈魂の敬虔之を生じ善き良心之を養ひ神之を天の寶庫に受く。然れども靈魂の地に優れるが如く此の產物も亦彼の產物に優る。故に預言者中偉大の或人—其の名をオシャと云ふ—も神を侮辱し其怒を宥めんと欲する者に勸むるに獻祭の爲め牛の群や麥粉や雄鳩や牝鳩や其の他之に似たるものを携へ來れと云はず然らば何を携へ來れと云ひしぞ。曰く『言を携へ來れ』と(オシャ十四の三)人或は曰はん言は何たる獻祭ぞと。愛する所の者よ是れ至大至貴他の諸獻祭に勝るものなり。之を言ふ者は誰ぞ。他なし衆人よりも確に且最も善く之を知る者即ち英武なる偉人ダワィド是れなり

彼曾て戰勝の爲め感謝の祭を献げつゝ『我歌を以て我が神の名を讃榮し頌を以て彼を讃揚せん』(聖詠六十八の三十一)と云ひ而して後我等に此献祭の優勝なる所以を示して『此れ主に悅ばるゝは牛及び角と蹄とある犢に逾らん』(同上三十二節)と云へり。されば我も亦今日此犧牲を献り此献祭の血にて靈的の祭壇に獻らんと欲せしも我何をか爲さん。一睿智者は『罪人の口に於ける讃美は悅ばれず』(シラフ十五の九)との言を以て我が口を塞ぎ我をして慄然たらしむ。榮冠に於て曾に花の清きを要するのみならず之を編む手の清きを要する如く聖なる歌に於ても獨り言の敬虔なるを要するのみならず之を編するの靈魂も亦清潔ならざるべからず。而も我が靈魂は清からず勇みを有せずして多くの罪に充滿せり。然れども此の如き性質の人には獨り此法のみならず他の之れより先に制定せられたるの古法も亦口を塞ぐなり。今我等と共に献祭のことを物語りたるダヴィドは此法律を設けたり蓋し彼は『天より主を讃め揚げよ至高に彼を讃め揚げよ』と云ひ而して後稍ありて又『地より主を讃め揚げよ』(聖詠百四十八の一七)と云ひ彼れ此れの造物、上なるものと下なるもの、物質的のものと靈妙的のもの、有形のものと無形のもの天の上に在るものと天の下に在るものを呼び集め彼と此れより一樂隊を編成して萬物の王を讃揚するを命じながら罪人をば何處に於ても召集せず乃ち此にても彼の前に戸を閉ぢたり。

第二。我が言を汝等の爲め更に明白ならしめんが爲め我は先づ聖詠の本文を朗讀せん。彼曰く『天より主を讃め揚げよ至高に彼を讃め揚げよ其の悉くの天使よ彼を讃め揚げよ其の悉くの軍よ彼を讃め揚げよ』と(一、二節)。讃め揚ぐるの天使を見るか、首天使を見るか

「ヘルワィム」及び「セラフィム」等―此等高尚の能力を見るか。蓋し彼が『其の悉くの軍』と云ふは天上の全軍を指すものなり。然れども此に罪人の居るを見るか。或は曰はん彼焉んぞ天に現はるゝを得んやと。縦し汝を地に下して樂隊の他の部分に移さんに此にても復た彼を見ざらん。『大魚と悉くの淵野獸と諸の家畜匍ふ物と飛ぶ鳥は地より主を讃め揚げよ』と(同上七十節)。此言を聞て我の默したるは偶然に非ず故なきに非ず我は遽然として痛哭長大息せり。之れより憫むべきもの何かある請ふ我に告げよ。蠍の如き蛇の如き龍の如き皆彼等を造りたる者を讃め揚ぐるに召さるゝに獨り罪人は此の神聖の樂隊より除外せらる而して此事當然なり。罪は奸惡獰猛の獸にして啻に其の同役の者に惡意を表するのみならず主の光榮にも憎惡の毒を注ぐものなり。主曰く『爾等に縁りて我が名は異邦人の中に謗らる』と(イサイヤ五十二の五ロマ二の二十四)。故に預言者は罪人を神聖なる國より放逐する如く宇宙より放逐して流竄に處したり。功妙なる樂手も此の如く整々たる(キファラ)(樂器)より調子外れの絃を去り以て他の音調を亂さゞらしめんとし良醫も亦此の如く腐敗したる肢を斷ちて以て之より他の健全なる支肢に傳染せざらしめんとす。預言者も亦此の如く罪人を以て恰も調子外れの絃又は腐敗したる肢の如く造物の全體より斷てり。我將た何を爲さんや。我は斥けられ切斷せられたるを以て固より默せざるべからず。されば我豈默して可なるか。豈何人も我に我等の主宰を稱讃するを許さゝるか我が汝等の祈禱を請ひたるは徒然なるか汝等の保護を求めたるは無益なるか。否是れ無益に非ず。我は汝等の祈禱に依りて稱讃の他の方法を發見せり此祈禱は斯く疑惑躊

躇する間に輝きたること恰も電の暗中に閃々たる如くなりき他なし我は同役者を稱讃せんとす。同役者を稱讃して可なり彼等にして稱賛せらるゝ時はその讃榮が主宰にも移らんこと必せり。主宰が此の如くにして讃榮せらるゝことはパリストス自ら左の言を以て之を示せり曰く『爾等の光は人々の前に照るべし彼等が爾等の善き行を見て天に在す爾等の父を讃榮せん爲なり』と(マトフェイ五の十六)是れ罪人も用うることを得て法律を破らざるを得る讃美の他の方法なり。

第三。されば我は同役者の中果して何人を稱賛すべきか。本國の師たると共に本國を經て全世界の師たる者(即ちアンティオヒヤの主教フラワィアン)を稱賛せずして誰をか稱讃せん。彼が汝等に死に至るまで眞理を固守せんことを諭したる如く汝等も他の人々に敬虔に背かんよりも寧ろ生を棄てんことを敎へたり。此より彼の爲め讃美の榮冠を編まんこと汝等の欲する所なるか。我も亦之を希望せんも功勞の測るべからざるものあるを見我が言の深淵に陷りて再び浮び出づるの力を失はんことを恐る。旅行警醒焦慮勸諭奮鬪戰利品に次での戰利品、勝利に次での勝利、啻に我が言に超ゆるのみならず凡そ人間の言に超え凡そのことを言ひ且敎ふるを得べき聖神にて動かさるゝ使徒の言を要する行爲の如き往時の功勞を枚擧せざるべからず。されど此部分は姑く措て言はず他の更に安全にして小さき獨木舟にても渡るを得べき部分を擧げん。先づ節制の一事を擧げて彼が高貴の家に養育せられながら如何に腹を制し如何に奢侈を蔑視し如何に豐かなる食卓を斥けたるやを言はん貧困の裡に生活したる者斯く貧しく且粗き生活に着手する時は毫

も怪むに足らず此の如き人は貧困の中に毎日此重荷を輕うする同伴者を有するも富を有する者其の桎梏を脱出するは容易の業に非ず恰も濃き黑き雲の如く智の目を塞ぎて天を仰ぎ見せしめず下に垂れて地を見せしめんとする諸慾なる多くの病はその靈魂を包括す。富と富より出づるの災難ほど天に昇るを妨ぐるもの他に決して之れあるなし。是れ我の言に非ずしてハリストス自ら述べたる所の宣告なり曰く『駱駝が針の孔を穿るは富める者が神の國に入るより易し』と(マトフェイ十九の二十三二十四)。然るに此の不便なるもの否寧ろ不可能の事は可能の事と爲り曾てペトルが師に對して疑ひてその知らんと欲したる所のことは我等皆實地に之を知り且その知りたる所更に多し何となれば此人や富の外青春及び孤獨の如き眩惑力毒害力を有して最も甚しく人間の靈魂を昧すの恐れある少からざる障碍を有したるに拘らず啻に自ら天に登りたるのみならず斯く多くの民を彼處に導かんとすればなり。彼は此等のものに勝ちて天に直進し彼處の聰明に執着して現生の光輝を意に介せず祖先の門閥に意を注かず寧ろ詳言せば自然の必要に依りて彼と連結せられたるの祖先にあらで敬虔の意嚮に依りて彼に近き祖先の顯達に目を注ぎたり。故に彼は此くの如き者と爲れり。彼は列祖アウラアムに目を注き偉人モイセイ即ち王宮にありて養育せられ贅澤なる食卓に快を取り埃及の喧々囂々たる間に交はりたるも(野蠻民の如何なる者にして彼等が如何に傲慢及び虛榮に得々たるやは汝等の知る所なり)此等のものを悉く蔑視し甘んじて粘土の業に轉じ煉瓦石を造るに着手し王及び王子が奴僕及び捕虜の中に入らんと欲したる者に目を注ぎたり。故に彼の歸るやその威風堂

堂たる姿その曾て有して斥けたる所のものに優れり。その逃亡して外舅に事へ他國に在りて災厄に遭ひたる後王の主治者否寧ろ王の神と爲りて歸れり主曰く『我爾をして「ファラオン」に於けること神の如くならしむ』と(出埃及記七の一)彼は王冠を載かず紫衰衣を纏はず金の車に乘らず此等の華美を悉く蹂躙したるも光榮赫灼たること王者に勝れり蓋し聖書に)曰く『王の女の光榮は皆内にあり』と(聖詠四十四の十四)彼は啻に人々に命令するのみならず天と地と海と空氣及び水の本質、湖、泉及び河に命令するの帝笏を携へて歸れり何となれば五行は悉くモイセイの意に從ふものと爲り造物は彼の掌裡に變化し恰も己の主人の友の來りたるを見て唯々諾々惟命維れ從ふ下婢の如く萬事彼に聽從し恰も主宰其者に對するが如く彼に服從したり。此人も亦彼を仰ぎ見て―且彼若し少壯の時ありたりとすればその少壯の時―此の如き者と爲りたり但余は此事(少壯の時)を信せず老練の智はその襁褓の時より彼に存したるなり。然れども彼は年齡に依りて少壯なるも智を悉く網羅し吾人の天性が林の茂りたる畑の如きものたるを看破して恰も鎌を以てするが如く敬虔の言を以て心靈の病を斷ち截り播種の爲め清き畑として農夫に委ね此等の種を悉く受けて深く之を藏め下に根を作りて日光の熱に苦まず荊棘に苦められざる如くしたり。此の如く彼は己の靈魂を耕へし肉體の慾は節制の療法にて之を鎭め肉體に對し恰も制御し難き悍馬に對する如く齋戒の馬勒を嵌め之を抑制するの揚句情慾の口をして血に塗れしむるに至れり但適宜の度を以てしたるなり蓋し馬梧にて縛られたるの馬が彼の爲め役に立たざるものと爲るが如く過度に强く肉體を鞭韃せず又之をして非常に肥沃の土

に陷り過度に肉體的と爲らしめて之を御するの智に逆ふが如くせず乃ち其の健康と體裁とを共に慮れり。且彼は獨り少壯の時此の如き者たるのみならず此年齡を過ぐるに及んでも此の如き焦慮を止めず反て今日老年に際して穩かなる港に在るが如き時に於ても依然として此の如く慮ることを繼續す。愛する所の人々よ實に靑春は怒濤暴風に激せられて荒れたる海の如く頒白は恰も老衰した人の靈魂を穩かなる港に入るゝものゝ如く之をして其年齡に相當したる安穩を樂ましむ。此人や今此安穩を樂み我の前に言へる如く港に在り乍ら海の中に漂はさるゝ者の爲にも煩慮すること少からず此の如き恐懼は彼之を夫の天に登り之に次ぐものを超えて第三の天にまで達し乍ら「他人を敎へて自ら棄てらるゝ者と爲らんことを恐る」(コリンフ前九の二十七)と云ひしパワェルに學びたるなり。故に此人も常に安全の狀態に在らんとして常に戰々兢々舵の側に坐してその注目する所星の昇りにあらず暗礁にあらず乃ち惡鬼の襲擊惡魔の奸計意思の反逆にして己の軍隊の周圍を巡視しつつ衆人を安全に守る。彼は獨り舟の覆沒せざらんことを慮るのみならず凡そ航海する者をして一人たりとも如何なる不安をも經驗せざらしめんとて有らゆる處置を執れり。彼と彼の賢慮の故に依りて我等は船に滿帆を飄へして安全に航海す。

第四。我等に此人を生みたる前の父(アンティオヒヤの主敎座に於けるフラヴィアンの先任者聖メレティイ)を失ひたる時我等の狀態困難なりき。故に我等は恰も他の此の如き人物此敎座を嗣ぐを期待せざるものゝ如くにして痛哭したりき。然れども此人出でゝ我等の中に立つや我等の煩悶を恰も雲の如くに一掃し憂悲を悉く散じ

て我等の涕泣を止めたり而して之を止むるや漸を以てせず忽ちにして恰も夫の福たる者自ら墓より起き出でゝ再び此教座に登りたるものゝ如くなりき。然れども我は我等の父の功勞に恍惚たるの餘り不知不識程度を超えて說教を續けたり但程度とは彼の功勞の程度にあらで—此事は我未だ言ひ始めざるなり—乃ち我の壯年に相當する程度を超えたるを云ふなり。我等は恰も港に於けるが如く沈默を以て說教を已めん。彼(說教)は中止せらるゝを好まず憤然快々として充分精華(能辯の)を樂まんとするも諸子よ是れ不可能なり。端倪憶測すべからざるものを追究するを已めん以上述ぶる所のこと既に我等の慰籍の爲に充分なり。高價なる香油に對しても亦猶此の如し香油は啻に之を器物より注ぐ時のみならず指にて其端に觸るゝも芳香空中に馥郁として其座に在る者をして其香に慫

かしむ今も亦我の言の力に依らず乃ち此人の功勞の勳に依りて此の如きこと行はれたり。去來祈禱しつゝ去らん我等の共同の母(教會)が不屈不動のものとなりて此の父たり師たり牧者たり舵手たる者の長壽を保たんことを祈らん。若し汝等我にも眷顧し(蓋し月足らぬ者を完全に生れたる者と同等にすべからざる如く余は己を司祭と同列にすることを敢てせず)—若し汝等概して我を假令月足らぬ者(コリンフ前十五の八)としてなりとも聊か眷顧を垂れんとするの意あらば請ふ上より我に大なる佑助の降らんことを祈れよ。我は曩に穩かなる生活を爲せし時にすら保護を要したるに今人中に曳出さるゝに及んで—人の助勢に依るか將た神の恩寵に依るかは我之を言はず人をして我伴りて之を言ふと思はざらしめん爲め汝等と此事を議せざるべし—我曳き出されて此の堅くして重き荷を

己に受くるに及んでは夫の「タラント」を受けたる者呼び出され連れ來られて計算を爲すべき日に於て我が我に聘質を與へたるの主宰に之を完全にして歸さんが爲には我に救助の手は必要なり無數の祈禱は必用なり。されば我をして縛られて(外の)幽暗に投げらるゝ者の數に如へず我が主イエスハリストスの恩寵仁慈に由りて聊かなりとも寛容を得る者の數に入るを得せしめんが爲め祈禱せんことを請ふ光榮權能及び叩拜は永遠に彼(ハリストス)に歸す。「アミン」

明治四十一年六月一日印刷
同　年六月五日發行

翻譯者　上田將
發行者　藤澤次利　東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地
印刷者　中村彌助　東京市京橋區日吉町十番地
印刷所　近藤商店　東京市京橋區日吉町十番地

發行所　ハリストス正教會編輯局
東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

325
50

325
50

020834-000-0

325-50

神品論・司祭に按手後の説教

イオアン／著

M41

ABI-0661